



越前燧城（ひうちじょう）から今庄宿を望む（福井県南条郡南越前町今庄）画像提供：南越前町観光連盟

平安時代末期の治承4年（1180）4月、高倉宮^{たかくらのみや}以仁王（後白河法皇三男）は、東海・東山・北陸三道^{とうかい とうさん ほくりく}諸国の源氏に、平氏打倒の令旨^{りょうじ}※1を發し挙兵を試みた。しかし事前に企てが露顕し、源頼政らとともに奈良に遁れる途中、平維盛（平清盛の嫡子重盛の嫡男）らに宇治川で追撃され敗死する。源平合戦の始まりであった。

次いで同年8月、以仁王の令旨に呼応した源頼朝が伊豆国で挙兵し、翌9月には、源（木曾）義仲が信濃国で、源（武田）信義も甲斐国でそれぞれ挙兵する。このため朝廷は、11月7日になって、北陸等の三道に、頼朝追討の宣旨^{せんじ}※1を下した。

また同月23日には、東国の反乱の余波が京都に近い近江国にも及んでいた。山本義経や弟柏木義兼らの近江源氏の一族が反乱を起し、同国勢多沿岸の船舶を留め、北陸道諸国からの運上物を悉く奪い取る動きがみられ、「北陸道頗る反気あり」との報が京都に伝わっていた。

北陸道の反乱と追討使派遣

治承5年（1181）6月、越後の城助職が平氏の命によって信濃国に

攻め入り、同国の横田河原（現長野市）で木曾党・佐久党・甲斐武田党の連合軍と戦い、奇襲戦に遭って惨敗し、越後に敗走した。

『延慶本平家物語』※2によれば、この合戦を機に、越前の稲津新介実澄・斎藤太・平泉寺長史斎明や、加賀の林・富樫・井家・津幡、能登の土田、越中の野尻・河上・石黒・宮崎・佐美太郎など、北陸道の武士たちが、木曾義仲に従うようになったとみえる。

さらに同年7月頃には、加賀・能登両国の武士らが東国の源氏に加担して蜂起したため、能登守平教経（清盛の甥）配下の能登国衙^{こくが}※3の目代^{もくだい}※3が京都に逃げ帰るとともに、国司の郎従たちも現地で頸を切られる事件が起こった。こうした北陸の平氏に対する反乱の動きは、既に越前国にまで達していたとされている。



燧城合戦の一場面（平泉寺長史斎明の寝返りで燧城に攻め入る平氏勢（右）と退却する義仲勢（左）「平家物語絵巻 巻第7上 火打合戦（三）」画像提供：林原美術館／DNPartcom

※1 「令旨（りょうじ）」は、皇太子・三后（太皇太后・皇太后・皇后）・女院・親王など皇族の命令を伝える文書。

「宣旨（せんじ）」は、天皇・太政官の命令を伝える文書。

※2 鎌倉末期の延慶（えんぎょう）年間（1308～1311）に書写された、現存する最古の平家物語の写本。

※3 「国衙（こくが）」は、律令制下、諸国に置かれた国司が執務する役所。

「目代（もくだい）」は、平安後期以降、任国に下向しない国守に代わり、在国して国務を代行した代官。

そうしたなかで、同年8月15日になって反乱鎮圧の北陸道追討使として平経正(清盛の甥)が郎従500騎を率いて京都を進発し、翌日には平通盛(教経の兄)も追討使として北陸に向かい越前の国府(武生)に陣を置いた。

しかし同月23日に、加賀の武士たちが越前に乱入して大野・坂北両郡を焼き払い、翌9月6日には、加賀との国境で、藤原清家を大将とする平氏軍が、当初同軍に加わっていた稲津実澄・斎明ら越前住人の反逆にあって、通盛の郎従80余人を討たれ敗北する。このため通盛は、越前国府の陣を払って敦賀に退却し、京都に援軍を求める有様であった。

その後、9月28日になって、平行盛(清盛の次男基盛の長男)・同忠度(清盛の末弟)が、北陸道追討使として軍勢数千騎を率い進発する。しかし越前国内では、既に反平氏の動きが高まっており、11月20日には、先に越前に追討使として下った平通盛・同行盛らが、その勢威に押され京都に帰還していた。

平維盛の発向と燧城合戦

明けて寿永元年(1182)は、安徳天皇の踐祚^{せんそ}※4にともなう大嘗会^{だいじょうえ}※5が挙行されることになったため、後白河法皇の決断で、北陸道追討使の派遣は一時停止となった。この間、木曾義仲と結ぶ北陸道諸国では在地武士による反乱状況が続いており、その制圧が引き続き課題とされていた。

このため寿永2年(1183)4月17日になって、平維盛を総大将とする追討軍10万騎が、北陸道に発向することになる。『源平盛衰記』※5によれば、維盛率いる追討軍の主力は、敦賀を経て木ノ芽峠越えの道を取り、別道隊は、栃ノ木峠越えの山道を進んで、越前国南条郡の今庄付近(現南越前町今庄)で本隊と合流し、北陸の反平氏勢力の最前線基地となっていた同地藤倉山東端^{とうたん}の燧城(標高140m)に迫った。

『延慶本平家物語』には、平氏の大军を迎え撃つ燧城では、平泉寺斎明を大将に、稲津実澄・斎藤太の越前武士をはじめ、加賀の林・富樫・井家・津幡、越中の野尻・河上・石黒・宮崎・佐美の諸氏や、落合五郎兼行など5000余騎が楯籠り、守備を固めていたとみえる。彼等は前面の能美川(日野川上流)と新道川(鹿蒜川)をせき止め、周囲に水を湛えて対峙したため、向の山に陣を布いた平氏軍は攻めあぐね、徒に日が

過ぎていた。

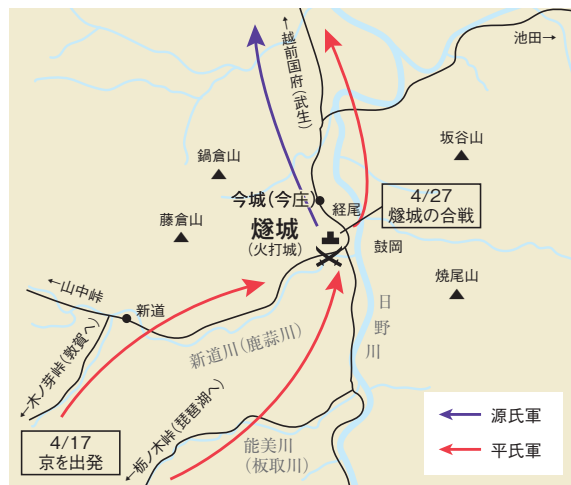
そうしたなかで、斎明は平氏の大军を前に、勝算なしとみて、密かに平氏方に内通を企てる。斎明は燧城攻めの道筋を記した文を墓目^{ふみひきめ}※6の中に籠めて、城内から平氏軍に射かけて知らせた。そのため、4月27日になって、500余騎の平氏軍勢がその情報を手がかりに城内に攻め込み、併せて斎明率いる1000余騎もこのとき寝返ったため、籠城していた北陸の武士たち(源氏勢)は、燧城を捨て坂井郡の河上城(現坂井市丸岡町川上)へと遁れた。

斎藤実盛と林光平の討死

その後源氏勢は兵糧米不足から河上城を出て近くの三条野で平氏軍と対峙する。このとき加賀国の住人林光明の嫡男今城寺光平が、「弓取は口の強き馬に乗っては必ず犬死する」と諫める父の制止を振り切り、大栗毛の強馬に乗り打って出て、平氏方に戦いを挑んだ。

そこで平氏方では、武蔵国の住人斎藤別当実盛が、「彼も斎藤、我も斎藤、共に利仁公(藤原)の末葉なり、恥ある者は、名ある者に逢てこそ死ぬるとも死なぬ、況一門なり」※7と名乗り出て、光平と戦闘に臨んだ。やがて双方は落馬して組み討ちに及ぶが、実盛の危うきを看て取った郎従二人が、そこに割り込み光平の頸を切った。親の諫言に従わなかった光平が犬死したという合戦譚が、『源平盛衰記』にみえている。

義仲方の燧城を陥落させた平氏軍は、以後平泉寺斎明を北陸道の案内者として、加賀国の篠原宿に撤退した源氏勢を追って、加賀へと進撃を続けることになる。



越前燧城合戦 平氏軍進路 (福井県南条郡南越前町今庄付近)

※4 「踐祚(せんそ)」は、皇嗣が皇位を継承すること。「大嘗会(だいじょうえ)」は、天皇即位後、最初に行われる新嘗祭のこと。

※5 平家物語の異本の一つ。

※6 鎌(やじり)の一種。中が空洞で表面に数個の穴のある木製の紡錘形のもの。それを先端に付けた矢。

※7 口語訳:「彼(＝今城寺光平:藤原利仁流林氏(加賀斎藤氏)の流れをくむ林光明の嫡男)も、私(＝斎藤実盛)も斎藤氏であり、共に藤原利仁公の子孫である。恥を知る者は、名のある者に会ってこそ死ぬべきであって、名もない者に討たれるような死にはできない。ましてや、同じ一族なのだからなおさらである」